

# アメリカにおける野生動物保護

～保護区設立に至るまでの歴史と現在の保護活動に  
ついて～

19AR171 龍智弘

## 研究旅行要旨

筆者は、8月23日～9月1日まで、アメリカにおける野生動物保護についての研究を行った。オクラホマ州にある Wichita Mountains Wildlife Refuge とワイオミング州にある National Elk Refuge, Yellowstone National Park を主な研究対象とした。先に記載した三ヶ所では、アメリカにおける野生動物保護活動に至るまでの歴史や現在の保護活動についての調査を行った。

また、私の研究旅行の目的はもう一つあり、それは、アメリカ先住民と野生動物の関係性を調査することであった。野生動物保護活動という「生物的」な観点だけでなく、かつてのアメリカ先住民との関わりを見ていくことによって、「文化的」な観点も追求できると考えた。そのことを知る上で、筆者が訪れた場所は研究報告書の本論の中で記載していく。

〈目的地〉

アメリカ合衆国（オクラホマ州・ワイオミング州）

### ● 研究旅行の目的

筆者は、卒業論文で「アメリカにおける野生動物保護」を大きなテーマとして現時点で考えている。ゼミの中でも、そのことについての文献を取り上げ、発表してきた。アメリカの野生動物といっても、かなりの数が存在するので、個体数が多く、アメリカ国内で有名な「エルク」と「バイソン」の2種類に焦点を当てて考察していく。

今までもこの2種類の動物の歴史的背景や現状について調べ、取り上げてきた。調べた中で、かつてのアメリカ先住民がこの2種類の動物で衣食住を織り成し、生活していたという「アメリカ先住民と野生動物の関係性」が見えた。これは文献やウェブサイトで得た情報で、このようにかつてのアメリカ先住民と野生動物の関係性については見ることができた。しかし、今現存するアメリカ先住民と野生動物の関係性については、文献やウェブサイト上の情報が少なく、詳しくは分からなかった。したがって、かつての先住民と野生動物の関係は現在どのようになっているのかいうことは現地で調査していきたいと考えた。「アメリカの野生動物保護」という分野に対しての文献やウェブサイトの情報が卒業論文を書く上では少なく、日本で調べるには限界があると感じ、今回現地に直接赴いてフィールドワークを試みたいと考えた。

調査する場所は、オクラホマ州のウィチタマウンテン野生保護区とワイオミング州のイエローストーン国立公園と国立エルク保護区であった。ウィチタマウンテン野生保護区には、野生のバイソンが生息し、野生動物保護について学べるビジターセンターがあり、ここでは、バイソン保護活動の現状を観察、施設訪問し、情報を集めたいと考えた。また、ワイオミング州にはイエローストーン国立公園と国立エルク保護区があり、ここにもビジターセンターが存在するので、イエローストーン国立公園と国立エルク保護区の保護活動の現状を観察し、資料収集を行いたいと考えた。

また、保護区や国立公園設立には必ず「人間」が関わっているため、現地で資料や情報を集めていく中で、人々の動きや現在どのようにして保護区や国立公園が維持されているのか・野生種の個体数を維持するための取り組みなどを調査していく。

今回の研究旅行の目的は、現地で上記のことを調査し、自分の中で一番の関心事である野生動物という分野に対する知識をより深いものにし、それを活かした卒業論文を作り上げることである。

### ● 期待される成果

日本にはない広大な国立公園・保護区に直接赴き、現地調査することによって、アメリカの野生動物保護に対する取り組み方、アメリカに存在する野生動物の現状などという今まで自分が持っていなかった新しい情報を入手することができ、野生動物という分野に対する知識の幅が広がる。また、アメリカ先住民と野生動物の関係性という点でも、今までは本やインターネットでしか情報を集めることができなかったが、実際現地で、聞き取り調査や資料収集を行うことで、日本では得られなかった新しい情報を入手することができる。

実際に現地でフィールドワークをし、情報を集めることによって、卒業論文の際、自分らしさ、自分の持ち味を引き出せた、内容の濃い卒業論文が完成する。そして、研究旅行で得た情報は、卒業論文のテーマの背景（第1・2章）や論文の中心となる分析・論点（第3章）として使用する予定である。自分が考えているテーマの論文を書いた卒業生は少ないと思うので、野生動物と人間・文化との関連性についての新しい情報や知識を提供し、西南学院大学国際文化学部における上記の分野についての研究に本格的に貢献する。

### 〈調査日程〉

	滞在地	
8月23日	移動日	福岡→東京→オクラホマ州
8月24日	オクラホマ州	EXHIBIT C（アメリカ先住民と野生動物に関する情報を入手した施設）
8月25日	オクラホマ州	RED EARTH（アメリカ先住民と野生動物に関する情報を入手した施設）
8月26日	オクラホマ州	Wichita Mountains Wildlife Refuge
8月27日	移動日	オクラホマ州→ワイオミング州
8月28日	ワイオミング州	National Elk Refuge
8月29日	ワイオミング州	Yellow Stone National Park
8月30日	ワイオミング州	Yellow Stone National Park
8月31日	移動日	ワイオミング州→東京
9月1日	移動日	東京→福岡

## 研究報告書

### 1.EXHIBIT C

筆者は、当初の目的では、オクラホマに入り、まずは The American Indian Cultural Center and Museum にて、調査を行うつもりであった。しかし、現地に入り、実際にその場所を訪ねてみたものの、閉館となっていた。近くに警備員の方がいたのでお話を伺うと、この施設が開館されるのはこれから3年後のことだと言われた。

下調べ不足が出たものの、その後、オクラホマのダウンタウンにある Information Center を訪ね、アメリカ先住民と野生動物に関連する情報が得られる施設について伺った。そこで、見つけたのが EXHIBIT C という施設である。

筆者がまず調査のために訪れたこの施設は、バイソンの絵画(図1)やアメリカ先住民の絵画、造形物などが展示してある施設であった。個人経営しているアトリエに近い雰囲気のある場所であった。ここには、かつてのアメリカ先住民とバイソンとの関係を調査するために訪れた。

この施設のオーナーの方に話を伺ったところ、全てのアメリカ先住民がバイソンのような野生動物と関わりを持っていたわけではないことが分かった。アメリカ先住民時代の西海岸付近では漁業が栄え、南部付近ではすでに農業が発達していた。バイソンなどの野生動物と関わりがあったのは中部付近に住んでいたものたちが主であった。野生動物を追って、中部付近に移住してきた先住民もいたという。

中でも、特に北アメリカ先住民の一族である、シャイアン族、カイオワ族、コマンチ族という3部族がバイソンと深い関係を持っていた。この部族達は、生活の基盤を専らバイソンに頼っていた。例えば、彼らが住んでいたティーピーと呼ばれる円錐形のテントがバイソンの皮で作られたり、スプーンやナイフなどの生活用品がバイソンの骨で作られたりしていた。まず、彼らが住んでいたティーピーと呼ばれる円錐形のテントがバイソンの皮であった。そのほか衣類やモカシと呼ばれる靴、紐、袋、網などの日常必需品は、ほとんどバイソンでまかなわれていた<sup>1</sup>。

また、3部族はバイソンを捕える際に、馬に乗って狩猟をしていた(図2)。当初、先住民たちは自らの足のみで狩猟を行っていたのだが、スペインからの入植者が馬という新しい移動手段をもたらしたことで、狩猟が活発化した。

このように、全てのアメリカ先住民が同じような生活を送っていたわけではないことが分かった。また、1600年代には、多くのアメリカ先住民が多文化に同化していき、狩猟を行い、生活を成すという光景はあまり見られなくなっていった。

---

<sup>1</sup> 藤原英司『アメリカの動物滅亡史』、朝日新聞社、1976年、12-13頁。

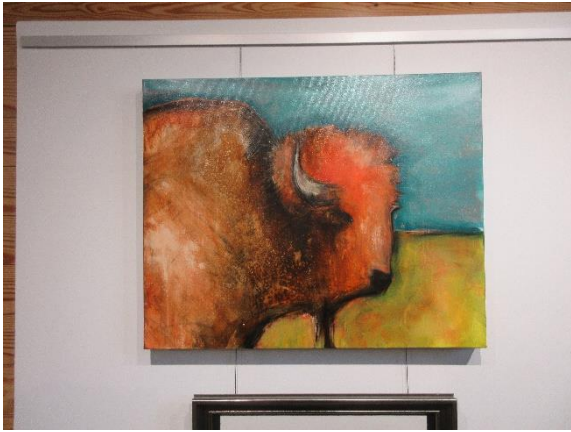


図 1：バイソンの絵画  
撮影者：龍智弘、8月24日



図 2：馬に乗り狩りをするアメリカ先住民の絵画  
撮影者：龍智弘、8月24日

## 2. RED EARTH

筆者が次に訪れたこの場所も先に訪れた施設と似たアトリエのようなところではあったが、この施設には、バイソン以外の動物の絵画、アメリカ先住民が身に付けていた装飾品が展示してあった。この施設のオーナーの Eric さんにお話を伺ったところ、アメリカ先住民の装飾品として鷹（多くのアメリカ先住に、創造者と崇められていた）や鷲の羽を使って、髪飾りや現代で言う扇子のようなものが作られた（図 3）ことが分かり、アメリカ先住民がバイソンのみならず、オオカミや鷹などの他の野生動物とも関わっていたことがわかった。

例えば、狩猟の際に、オオカミの皮を被り、その動物に扮して対象動物に接近するという方法がなされていた（図 4）。忍び寄りという狩猟法は、藪や岩、溝などのくぼみを利用して接近したり、バイソンの子の皮を被り、母親とはぐれた子牛のような鳴き声を上げて近づいたり、オオカミの皮を被って、相手の目をごまかしたりするなどというものである<sup>2</sup>。

また、バイソンの皮で作られた靴（図 3）や太鼓が実際に展示してあり、自身の目で確かめることができた。靴は専ら生活用品のためのものである。しかし、太鼓は、先住民たちが狩った動物に対する宗教的な儀式を行う際に用いられるものであった。その例として、その動物が犠牲になったことで、先住民自らの命を生き長らえさせることができたという感謝の儀式がある。ほとんどすべての部族が、動物の精霊に対する敬意を、動物の特徴や動きを真似た踊りによって表現する。狩りの踊りは、人間が命を保つために狩った動物たちに対する感謝を表しており、かつては広く行われていた<sup>3</sup>。バイソンは、特に平原に住んでいたインディアンにとって重要な役割を果たしていたので、現在でもその子孫達による、多くの儀

<sup>2</sup> 藤原英司『アメリカの動物滅亡史』、朝日新聞社、1976年、14頁。

<sup>3</sup> P.R.ハーツ著・西本あづさ訳『アメリカ先住民の宗教』、青土社、2003年、81頁。

式、踊りが行われている。

上記の 2 つの施設を訪れて、アメリカ先住民が野生動物に深く頼っていたことが分かった。また、中部付近に住んでいた先住民たちがバイソンのみならず、他の動物とも生活を成すうえで関わっていたことが見られた。

筆者が訪れた 2 つの施設はオクラホマ州のダウンタウンにあり、この町の至る所でバイソンの像を見かけた (図 5)。このことから、かつてオクラホマ州に住んでいた先住民たちがバイソンに頼って生活していた名残が感じられ、現在でもそのことを目で確かめることができ、この町とバイソンとの間に強い結びつきがあると感じた。バイソンはアメリカのその他の州にも生息しているが、オクラホマはアメリカの中でも特に強くバイソンの恩恵を受けた場所である。



図 3：鷹の羽で作られた扇とバイソンの皮で作られた靴

撮影者：龍智弘、8月25日

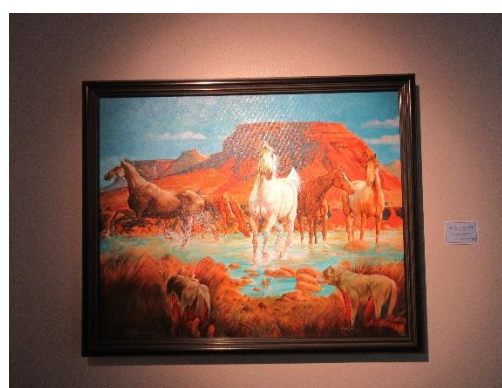


図 4：オオカミに扮して狩りを行うアメリカ先住民の絵画

撮影者：龍智弘、8月25日



図 5：オクラホマのダウンタウンにあるバイソンの像

撮影者：龍智弘、8月25日

### 3. Wichita Mountains Wildlife Refuge

ここはオクラホマ州にある野生動物保護区である。ここでは、野生のバイソンを観察することができる。筆者は、まず、Wichita Mountains Wildlife Refuge 内にあるオクラホマ州の野生動物保護に関する情報が得られるビジターセンターへと向かったのだが、その道中で数頭の野生のバイソンを見た。

ビジターセンター（図 6）では、野生動物保護に関する多くの情報を得ることができた。

この野生動物保護区は、バイソン以外にも様々な動物を保護対象としている。（しかし、私は今回、バイソンに関する情報を中心に集めに訪れたので、他種のことは省略する）

バイソンは、1800 年以前までは北アメリカで最も生頭数の多い哺乳類であった。莫大な牧草地で数千エーカーの草を食べ、草原を支配していた。しかし、1830～1880 年の間に、バッファローハンターなどの手によって 6000 万頭ほどが殺された。そこで、Wichita の森林経営者は、1907 年にニューヨーク動物園から 15 頭のバイソンを連れてきた。その後、群れは繁殖していき、種の転換期となった。時のルーズベルト大統領は、1905 年に議会に対し、野生動物保護の土地を確保するように奨励した。

保護区設立以前、開拓者やプロのハンター達は、ハンティングなどのゲームで元来その土地にいた動物たちを殺戮していった。その中でも圧倒的数の多かったバイソンは、最大のターゲットであった。

1905 年、Wichita 山脈（図 7）は、連邦政府によって、野生動物保全区域になった。それはこの地で絶滅危機に瀕している動物たち、特にバイソンを救うことを焦点とした。この保全区域は、今日、9000 エーカー以上の自然区域を守っている National Wildlife Refuge System の創設の重要なきっかけとなった。

保護区設立当初の活動としては、馬や牛などの家畜動物を利用した放牧を行い、保護区内に動物が生きていく上で十分な草原を復元させた。また、高さ約 2m の丈夫なフェンスを構築した。さらに、保護区内のバイソンなどの草食動物を脅かすオオカミやクーガーなどの肉食動物を殺戮することで、捕食者のいない環境を人間の手で作成し、草食動物の数を増やしていった。

今日、保護区内のバイソンの数は生態学的バランスを維持するために、550～650 頭までという規定がある。それを維持するための現在の保護活動として、年に一回、保護区内の専属獣医による感染症予防のためのワクチン接種が行われる。その際に、年齢や性別の調査も行われている。また、耳の底にマイクロチップを挿入することで個体を識別している。これは食料品店の製品バーコードのようなものであり、スキャンすることでその特定の個体に関する情報を取得することができる。このようにして、生体の情報の把握、管理が行われている。また、過剰に増えすぎたバイソンに対しては、毎年行われる競売に出すことで、その生頭数を一定数に維持し、種のバランスを保っている。

毎年、何千人もの人々がこの保護区を訪れているため、保護区内にごみが捨てられるという事態が発生している。これらのごみは野生動物を脅かすものであるため、今日、保護区側

は、定期的に地域の人々との協力を得て、ごみ拾い活動を実施している。また、毎年、保護区内でのキャンピングツアーが実施され、訪問者に保護区について見て学ぶ機会を提供している。これは「野生動物保護」というものに対する人々の関心をより広く、深いものにしていこうとするための、重要な取り組みである。



図 6 : Wichita mountains wildlife refuge  
のビジターセンター入口  
撮影者：龍智弘、8月26日



図 7 : Wichita mountains wildlife refuge  
撮影者：龍智弘、8月26日

#### 4.National Elk Refuge (図 8)

筆者は、ワイオミング州に入り、まず National Elk Refuge を訪れた。筆者はこの場所に野生のエルクを見に来たのだが、保護区内を一通り移動してみても、一匹も見ることができなかった。後に、近くにあるビジターセンターに移動し、関係者の方に話を聞いてみると、エルクが保護区内にいるのは、冬のみで、それ以外の季節は近隣にある Yellowstone national park や Grand Teton National Park に分散しているのだという。筆者の下調べ不足が再び出てしまった。野生のエルクを見ることができなかったものの、ビジターセンター内で情報を集めることはできた。ここで得た National Elk refuge についての情報は以下の通りである。

National Elk Refuge は、エルクの冬の飢えを凌ぐために 1912 年に、ジャクソン・ホールに設立された。この保護区は、冬のための保護区であり、ジャクソン・ホール一帯に生息するエルクを保護し、食料を供給している。この保護区の広さは約 2500 エーカーに及び、また、エルクだけではなく、バイソンやオオカミなど他の野生動物も保護対象に指定されている。

この保護区が設立された背景には、1908~1909 年の冬に何百ものエルクが餓死したことに起因する。また、冬に食料不足が起こると、限られた食料をめぐる、エルク同士や他の動物との衝突があり、それによってまた生頭数が減少した。また、当時は土地の開発、密猟、



狩猟が行われ、1909年にはジャクソン・ホールの群れの数は大幅に減少した。

その現実を知った市民たちは、エルクの群れを救うための運動を始めた。牧畜者、市民たちは干草を大量に寄付し、飢えたエルクに食料を与えるために時間と労力をかけた。そのことを知った米国議会は、保護区設立のために資金の援助をした。1912年8月10日、議会はジャクソン・ホールで National Elk Refuge の設立を承認した。

National Elk Refuge 設立以前、小規模ではあったが地域住民によるエルクのための活動が行われていた。それは、牛用の干草を分け与えるというものであった。また、保護区設立当初は、保護区内に十分な飼料が生産できていなかったため、地域住民から干草を購入していた。

現在は、保護区職員による保護活動が中心となっているが、以前は地域住民の援助によるものが大きかったということをお忘れてはならない。今日では、冬の食料供給のみならず、栄養が極端に不足しているエルクには、人工的に作られた食料を与えることによって、エルクの栄養不足の改善が行われている。雪などの影響によって、自然飼料がほとんど残っていない場合、保護区職員はアルファルファから作られたペレットを提供している。これは、人工飼料の一つで、自然飼料よりもより高い栄養価を持っている。保護区草地はエルクなどの野生動物のために十分な自然飼料を生産できるように管理されている。

また、エルクが保護区内を自由に行き来できるように、西と南の境界に沿って 8 フィート（約 250 cm）の高さのフェンスが設置されている。これは、人々などとの衝突を避けるための役割も果たしている。

ある種類の動物が比較的小さな区域に集中すると、害虫などによる環境汚染が発生しやすい。さらに、このことは動物に病気が広まる可能性が高くなる。保護区側はこの事態を避けるため、保護区の過度の使用を避け、保護するエルクの数を一定に定めている。エルクの数を一定数に維持するために、保護区に隣接する公有地内で秋に既定の範囲内での狩猟が行われている。

現在でもジャクソン・ホール内の市民など多くの援助を受けて、エルク達の給餌活動が続けられており、生頭総数の限度は約 15000 頭と定められている。



図 8 : National elk refuge の入口  
撮影者：龍智弘、8月28日



図 9 : エルクの角を組み合わせで作られたアーチ  
撮影者：龍智弘、8月28日

## 5. Yellow Stone National Park

筆者の最終目的地は、世界最初の国立公園、Yellow Stone National Park である。この国立公園内を周るには、ツアーバスかレンタカーを借りるかのどちらかになる。

筆者は、当初は、ツアーに参加して調査する予定であったが、ツアーの定員が満員だったこと（筆者が訪れた時期は、全てのゲートが解放されており、野生動物を見るベストシーズンだったため）やツアー代が予算の範囲内を大幅に超えていたため、レンタカーを借りて周った。国立公園内は広大で、至る所に停留所がある。そこで、景色を写真に収めたり、野生動物を観察したりできる。しかし、停留所以外の場所で野生動物を発見した場合、皆お構いなしに路上駐車を行う。この場所を訪れる観光客の目的は大自然と野生動物を見ることである。野生動物は一カ所に定住するものではなく、常に移動を繰り返すものであり、そこで遭遇するのが珍しいからであろう。

以下から筆者が Yellow Stone National Park で入手した情報を記載していく。この国立公園は、野生動物や野生の土地を管理するため、連邦と州の様々な団体が協力している。ここは野生動物のみでなく、様々な自然現象を見ることができる場所の一つでもあり、毎年世界中から多くの観光客が訪れる。

1872 年、世界初の国立公園 Yellow Stone National Park が誕生した。しかし、当初はこの場所を維持する予算が少なく、管理はほとんどなされていなかった。また、国立公園内の景観や動物、植物を保護する法律さえもなかった。

セオドア・ルーズベルト大統領の時代、彼が Yellow Stone National Park に訪れた際、その自然の雄大さに感銘を受け、この景観を保護すると同時に、人々にどのように楽しんでもらおうかということ考えた。彼は、自然やハンティングに関心のある人物であった。彼は、自らアフリカへ猛獣狩りに出向き、その狩猟記を出版するほど狩りと動物に造詣が深かった<sup>4</sup>。そして、本格的な国立公園政策が開始され、国立公園内の宿泊施設の建設、車道の整備などが行われた。国立公園内のパークレンジャーは、人命救助、森林パトロール、動植物の保護、ツアーガイドなどを行っている。

この国立公園内では、エルク、ブラックベアー、ムース、グリズリーベアー、オオカミ、バイソンなどをすべて野生の状態で見ることができる。私は、ここで、バイソン（図 10）、エルク（図 11）を目撃することができた。国立公園内には、野生ということで柵や檻が一切ないので、それぞれに接近できる距離が決まっている。例えば、ブラックベアー、グリズリーベアーからは、100 ヤード、その他の動物からは 25 ヤード離れるようにと取り決めがある。また、絶対に餌付けをしてはならないという取り決めもある。過去には、入場者数増加の目的のため、国立公園局がこの場所での野生動物への餌付けを推奨し、当たり前のように行われていた。そのことが自然のサイクルを破壊しただけでなく、野生動物に近づきすぎるあまり怪我をする観光客が続出し、死者までも出た。国立公園局は慌てて餌付けを中止したという。国立公園局は、原生自然の保護はもちろんのこと、生態系に注意深く配慮し、保

---

<sup>4</sup> 藤原英司『アメリカの動物滅亡史』、朝日新聞社、1976 年、90 頁。

護している。Yellow Stone National Park における野生動物の管理に関しては、基本的に自然のままにするという方針で運営されている。特にこれといった管理は行わず、自然界の法則に従っている。このことから、観光客がいかに野生動物との距離感や野生というものに対する意識を持つかが重要であると感じた。

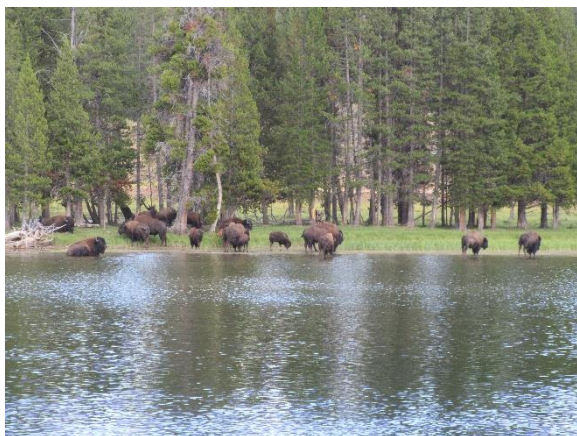


図 10：国立公園内の野生のバイソンの群れ  
撮影者：龍智弘、8月30日



図 11：国立公園内の野生のエルク  
撮影者：龍智弘、8月30日

#### ・最後に

今回の研究旅行で、実際に現地でフィールドワークを行ったり、現地の方々にお話を伺ったりしたことで卒論のテーマにも掲げている「野生動物保護」に関する理解がより一層深まった。また、日本にある文献や資料で事前に得た情報と現地で入手した情報が合致している点も多々あり、より一層理解を深めることができた。

アメリカ先住民と野生動物に関して、実際に現地で絵画や装飾品などに目を通すことによって、彼らが生活の術の一部として多種の野生動物を利用していたことが分かった。しかし、そのことに対する感謝の念や崇拝の念を忘れずに、常に自らの生活のために命を投げ打ってくれた動物達に対する信仰心を持っていたことも理解できた。筆者が訪れたオクラホマ州では、バイソンの存在があったからこそ、その地にいたアメリカ先住民は生活できた故、バイソンに対する彼らの信仰は深いものであった。その証拠に市街地にはバイソンの像が至る所にあり、また現在でもその子孫達によるバイソンを崇める踊りが行われていることから、かつてのバイソンの存在が今のオクラホマに大きな影響を与えているのだと思える。当時、狩猟に頼っていたアメリカ先住民は、その土地に元来住み着いていた野生動物無しでは生活できず、野生動物は神が与えてくれた恵みの一つであるという考えを持ち、そのことに起因する部分が大きく、彼らが頼ってきた野生動物達は、名誉と尊敬の対象となっている。

また、今回、オクラホマ州とワイオミング州で実際に野生動物保護区を訪れたが、自分が想定していたほど野生動物を目にすることができなかった。一カ所に定住せずに、常に移動

を繰り返す、そのことに「野生」というものを感じることができた。各ビジターセンターでの調査で、時代が進むにつれて、次々に技術革新が生まれ、常に最先端の保護政策が取られていることが分かった。それにより、生態系の維持や管理がより高レベルで行われるようになる。その恩恵を受け、保護区内の動物達はその種を維持し、悠々と生きていくことができる。その一方で、より人間が自然そのものに干渉したことになり、野生という言葉の持つ意味が曖昧なものになってしまうのではないかという危惧もある。

人手をかして野生生物を生きながらえさせるということは、自然保護の成功ではなく、失敗の是認にほかならぬ。真の自然保護的な成功とは、人手などかさなくても、野生生物が自力で生き抜いていけるようになった時の状態を指す<sup>5</sup>。この言葉は、かつて **Yellow Stone National Park** で起こった餌付け問題を例に挙げると、その現実を受け止め、二度と起こらぬように、現代の野生動物保護がより一層積極的に行われているという、ある種過去の過ちを認めているという観点で捉えることができる。今回の現地調査で、一度、人間が「野生」という絶対的な領域に干渉してしまえば、野生生物が自力で生き抜いていける<sup>6</sup>状態になることは不可能であると感じた。それは、既に、人間が保護区のあらゆる面で干渉してしまっている現実を目の当たりにしたからである。

現在の **Yellow Stone National Park** のように、保護区側も、自然のままの状態で、自然の法則に従う方針を取っていくことが、理想的である。しかし、保護区と国立公園ではその制度や取り組みは多少なりとも異なるものであり、今後の保護区における人間が干渉する部分を減らしていくことは、困難なことである。

そのため、「野生動物保護」において、人間と野生動物の距離感や人間がいかに「野生」ということに対して配慮していくかが重要であり、そのことを常に念頭に置いて行動していくかが我々にできる保護活動の一つである。

---

<sup>5</sup> 藤原英司『アメリカの野生動物保護』、中央公論社、1976年、33頁。

<sup>6</sup> 藤原英司『アメリカの野生動物保護』、中央公論社、1976年、33頁参照。

・参考文献表

- ・藤原英司『アメリカの野生動物保護』、中央公論社、1976年
- ・藤原英司『アメリカの動物滅亡史』、朝日新聞社、1976年
- ・P.R.ハーツ著・西本あづさ訳『アメリカ先住民の宗教』、青土社、2003年
- ・Wichita Mountains Wildlife Refuge Visitor Center, Oklahoma 資料参考
- ・National Elk Refuge Visitor Center, Wyoming 資料参考
- ・Yellow Stone National Park, Wyoming 資料参考